

会 議 名	令和7年度第1回小金井市立はけの森美術館運営協議会		
事 務 局	市民部 コミュニティ文化課（はけの森美術館）		
開 催 日 時	令和7年4月16日（水）18時30分～20時00分		
開 催 場 所	市立はけの森美術館 多目的講義室		
出 席 委 員	鉄矢悦朗会長 山村仁志委員 原田隆司委員 畑島一代委員 平田勇治委員 中川法子委員		
欠 席 委 員	なし		
事 務 局 員	コミュニティ文化課文化推進係 津端 佐原 同 はけの森美術館学芸員 中村、五木田 同 はけの森美術館学芸顧問 河合		
傍 聴 の 可 否	可		
傍聴不可・一部不可 の場合は、その理由	—	傍聴者数	0人
会 議 次 第	(1) 展覧会「ナカムラケンイチのシン人物画鑑賞」の観覧 (2) 事業実施報告 (3) 令和7年度の事業予定と予算について (4) その他		
会 議 要 旨	別紙のとおり		
提 出 資 料	資料1 開催中の展覧会・教育普及事業等 資料2 日程表 資料3 令和7年度予算状況について		

【鉄矢会長】 令和7年度第1回小金井市はけの森美術館運営協議会を開催したいと思います。

さて、次第の1、展覧会の観覧につきましては、既に皆様に御覧いただいたかと思しますので、次の議題に進ませていただきます。

それでは、本日の資料配付の確認を事務局のほうでお願いいたします。

【事務局】 事務局です。

ホチキス留めの資料1という縦長のものが1部、横の資料2の表が1部、資料3の横長の表が1部、あと、次第が1部で以上になります。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

次に、次第2について、事務局から説明をお願いいたします。

【五木田学芸員】 資料1の1番、開催中の展覧会・教育普及事業等につきましてはの御報告であります。

1) 展覧会、所蔵作品展「ナカムラケンイチのシン人物画鑑賞」展、会期が3月23日より5月18日まで。開館時間が午前10時より午後4時30分まで。休館日が月曜、火曜と4月30日、5月7日、5月8日。ただし、4月29日、5月5日、6日は開館いたします。観覧料、一般200円、小・中学生100円、未就学児及び障害者手帳をお持ちの方と付添いの方1名は無料。主催、はけの森美術館。

このようにスタートいたしまして、この展覧会から暫定的に、試験的に開館時間を30分繰り上げて、午後4時30分までとなりましたことと、休館日が1日増えて火曜日も休館となりましたことが、これまでの展示と変更になっている点でございます。

展示の内容につきましては、中村研一の人物画の魅力をお伝えする展覧会となっておりまして、今年が生誕130年、小金井に来られてから80周年となりますことから、この記念の年に、所蔵品の中から人物画を26点選んで展示をしていると、こういう概要でございます。ちなみに、26点の内訳としましては、肖像画が10点、婦人像が10点、裸婦像が6点でございます。

入館者につきましては、本日現在、一般の方が235人、子供8人、未就学児5人、招待57人、手帳の御提示が21人で、累計326人でございます。3月23日のスタートから、開館日が今日で17日目を迎えましたことから、1日平均としますと19.2名という、こういう状況になっております。なお、この入館者の中には、開館前日に行われたギャラリーコンサートの参加者は含まれておりません。

なお、そのほかの報告事項としましては、4月3日に市長と副市長が来館されまして、展示を鑑賞されました。

それから、マスコミ媒体への記事掲載、情報掲載としましては、4月11日に読売朝刊の都内版に紹介が少し出ました。それから、4月15日の朝日新聞夕刊の美術館・博物館の情報欄に、はけの森美術館が1行紹介されました。今後の予定としては、18日に朝日新聞朝刊の多摩マリオンで少し紹介していただける予定となっております。

簡単ではございますが、以上でございます。

続きまして、関連企画について、それから、津端係長のほうからお願いします。

【事務局】 ギャラリーコンサートとお茶会のほう、私のほうから御説明をさせていただきます。

ギャラリーコンサートの様子です。(写真を投影しつつ) こんな感じで絵があって、その前に演者さんがいらして、囲むような形で弓型にお客さんのほうが入られまして、ギャラリーコンサートというものを行いました。こちら、定員が40名ということなんですけど、何と応募が120名ぐらいあるという、なかなか3倍ぐらいの倍率のある大人気の企画になっています。

この企画自体の立てつけとしては、小金井市民交流センターという指定管理が入っているところとの協働事業ということになっていまして、ホールのほうが演者さんを決めて、演者さんのフォローだったり、当日の運営も含めてホールのほうがしていただいています。美術館としては、その後に行われる15分のミニギャラリートークを担当するという事になっています。交流センターのほうもアウトリーチという形で、外に出て音楽を届けるという活動をしている、その活動の一環として、外の1つとしてはけ美をまず会場に選んでいただいているというところがありまして、美術館としても、音楽というまた違う芸術の分野にはなるんですけれども、そこと一緒にやることで、「初めて美術館に来た」ってこの企画でおっしゃっていただける方もたくさんいるので、そういった狙いをもってやっている企画になります。

本当に毎年好評で、参加できない方の方が多いというところが本当に申し訳ない企画で、ぜひ本当は何回かやりたいねというのはホールの方と言っているんですけれども、いろんな兼ね合いもあるので、今のところ1回実施という感じになっています。

今回、レオナルド・ブラーボさんというギタリストの方に来ていただいて、演奏を行っていただいています。展示室のほうもちょっと狭いので、何かすごく振動の大きな楽器だ

ったりとかというと、結構聞いているのが疲れてしまうというのもあるので、なかなか楽器の選出というのも難しいようなんですけども、去年はハープだったりしたんですけど、今年はギターということなんですが、アルゼンチンギターということで、少し、ギターなんですけど、とても優しい感じというんですかね。ちょっとネットとかでぜひ、いろいろ出ていると思うので、聞いてみていただければと思います。

御料金のほうは、毎年変わらず1,000円ということでやらせていただいています、小学生以下の方は入れないんですけども、小学生以上ということで抽せんの方を行っています。

すごく御本人が絵も大好きという方で、いつも大体演奏さんって、もう演奏終わったら、くた一って行って楽屋へ戻られることが多いんですけど、楽屋に急いで楽器を置いて、急いで戻ってきたって言って、ギャラリートークももうばっちり聞いていただいて、その後ずっと五木田さんをつかまえていました。お話しされていたりとかもして。

【山村委員】 イタリアの方なんですか。

【中川委員】 アルゼンチンの方で、ただ、もう日本に住んでいらっしゃる。

【事務局】 はい。奥様が日本の方で。

【中川委員】 日本語、だからいけるという。

【事務局】 こちらにもう移住されていましたね。

こんな感じで、ちょっと雰囲気ですけど、やっておりました。

【山村委員】 曲目は。

【事務局】 プログラムの一部ですけど「ラ・クンパルシータ」、分かりますか。「ブラジル組曲」、「アディオス・ノニーノ」とかですね。何かちょっとタイトルだけだと難しい。

【中川委員】 曲のジャンルがあるんですよね。何だったかな。

【鉄矢会長】 ギターをこう立てて弾くんですか。立ち上げて弾く感じ？

【中川委員】 そこまでではないですね。

【事務局】 横だった気がします。

【鉄矢会長】 横でも結構上に上げている感じで。

【事務局】 確かにそうですね。上に上げぎみの横でした。すごく1日癒やされる感じでした。

【原田委員】 演奏者はお一人ですよ。

【事務局】 演奏者はお一人ですね。

【原田委員】　そうすると、40人よりももうちょっと増やせるのかなと思うんですが、それはどうなんですか。

【事務局】　これが難しいところで、展示室、平面なので、ここがちょっと傾斜がついていたりすると後ろの方も見えるんですけど、これ以上増やしてしまうと。

【原田委員】　見えなくなっちゃう。

【事務局】　見えなくなっちゃってつまらなくなっちゃうというところが1つと、あと、展示室の広さ的にもちょっと、これ以上行くとどんどん後ろになっちゃうので、大体ここぐらいかなというところのラインで収めていて。感想にも、一番後ろだったけど距離がそんなに離れていなかったから楽しめたというような感想もいただいているので、ちょっとここが限界かなというふうには思っているところです。

という企画がありましたというのが、一番最初のギャラリーコンサートというところになります。

次が、文化財5周年記念の「中村家のお茶会 和菓子とお茶を愉しむ」ということで、子供の部と大人の部と、午前と午後に分かれてお茶会を開催するという試みを実施しました。

開始するまでにいろいろあったのですけれども、開始をしたらすごく、やはりこれも皆さん楽しんでいただけたイベントでして、茶室の定員の関係で、午前、午後とも12名ずつで、1時間半ぐらいの時間の中で前半の方、後半の方で二部制にしてやったという、茶室の中がどうしても6人ぐらいが定員かなということで、ちょっとやらせていただきました。こちら、なので合計24人のところ、120人超えでして、もうほぼ100人お断りをしなきゃいけないというようなイベントになっていました。

第1部がお子さんだったんですけれども、お子さんのほうは、やはり自分で実際にやってみたいとかというのもある中で、茶室でやるとちょっと大惨事になるという可能性もあったので、茶室でお茶をたてるんじゃなくて、この場でお茶をたてることにしました。なので、ちょっと今、写真にも出したんですけれども、この白い机のところにいっぱいお茶わんがあって、先生に来ていただいて、子供たちにお茶のたて方を教えていただいたり、お菓子のお話もしていただいて、実際に子供たちもたててみて、ちょっとたてきれないところは先生がシャッと、最後きれいにたてていただくというような感じのこともやっていただいて、みんなおいしく食べていて、本当にかわいらしい癒やされる時間だったんですけど、お茶のほうはこんな感じでやっています。

一方で、茶室のほうの見学をするというのも今回、後半というか、前半の方も後半の方もいるんですけど、半分の時間は茶室見学と茶室の説明ということで、そちらは五木田さんのほうに御担当いただいて、みんな茶室に行って、わいわいお話を聞いておりました。森も見ていただいて、子供たちの感想の中でも、その時間も楽しかったという話もあったので、どちらもやってよかったかなというふうに思いました。

後半はもう本当にお茶会という感じで、大人の方メインだったので。こんな感じですね。ぎゅうぎゅうなんです。6人プラス先生がいると、もうあの4畳半の茶室が満杯という感じなんですけど、そこに皆さん、ちょっときゅうきゅうに入っていて。12人、無作為抽出なんですけど、たまたま細身の女性だったという、とてもラッキーな感じだったんですけど、全員無事に入りまして、ちょっとどうしようかなと思っていたんですけど、そこは心配要らずな感じでした。

講師の御紹介をという感じなんですけれども、元虎屋文庫の文庫長の丸山良先生に来ていただいて、全て、午前の部も午後の部もやっていただいた感じです。

おおむね皆さん、途中で写真なんかも撮りながら楽しんでいただけたかなというのと、茶室に今、掛け軸を飾ってあるんですけれども、こちら「菓子」なんて書いてある掛け軸を飾って、あと、2階の展示室に置いてある備前の花生けをその日だけここに持ってきて、見ていただいたりという感じで、ちょっと茶室のほうのしつらえもやりながらやっておりました。

こちらのイベントもすごく皆さん和やかにやっていたんですけど、感想も楽しかったというものがおおかったです。

何か本当に、私もお茶会があんまりどういうものかも分からずに突き進んだがゆえに、いろいろあったんですが、無事にできてよかったなというふうに思っています。

引き続き、ギャラリートークを五木田さんから。

【五木田学芸員】 続いての内容で、ギャラリートーク、2回ございまして、第1回目は12日の土曜日午後2時から30分間行いました。参加者は、ここには印字していませんけれども、大体10名ぐらいの方に聞いていただけたかなというふうに思います。

2回目、次回ございまして、26日土曜日午後2時から、同じ内容で行う予定でございます。

あと、無料開館日が設定されていまして、中村研一の誕生日の5月14日を記念して、その前後の日曜日にという、そういう設定になっておりますので、今回は5月14日の3

日前が日曜日ということで、11日に無料開館日を設定しております。

以上でございます。

【鉄矢会長】 続いて、外部の企画ですかね。

【事務局】 はい。宮地楽器ホールの友の会のファンミーティングということで、1年に何回か友の会のファンミーティングを宮地楽器ホールでやっているんですけども、そのうちの1つの企画として、「美術鑑賞&ティータイムを楽しむ会」ということで、美術館を見た後にお隣のカフェに行くというような企画でございました。

カフェのほうが大分スペースが限られているので、定員18名ということで募集のほうをしていたようでして、こちらの会場というか、こちらでギャラリートークをしつつ観覧していただくというところはうちだったんですけども、後半のティータイムのほうはカフェのほうに行っていたかということで、私たちのほうは関与しないような企画になっていまして、応募から実施まで全て宮地楽器ホールが主催をしていました。

なので、ちょっと間接的な、聞きましたという感じにはなってしまうんですけども、当日キャンセルみたいなのが結構相次いでしまったようでして、実際の参加者というのはとても少なかったらしいんですけども、来ていただいた方の満足度はすごく高かったですということはおっしゃっていました。

あとは、友の会のファンミーティング自体が、友の会自体が大分、65歳以上の方々が入会者数が多いというところと、あとは今回、御料金の設定が1,500円という設定だったようなんですけども、ファンミーティング自体が、毎回ほとんど無料の企画が多いようでして、ちょっと1,500円という値段も若干二の足を踏んだというか、原因だったのかなということだったのですが、またぜひ一緒にできたらいいなというようなことは、お話に出ておりました。

次の、国分寺もとまち公民館さんは、どうでしょう、五木田さん。

【五木田学芸員】 こちらは、隣の国分寺市のもとまち公民館の館長をされている方が、特に力を入れてこういう催しを企画してくださったということで、国分寺市には市の美術館がないということもあり、この当美術館をととても応援してくださっている方です。その方の呼びかけにより、市民の皆さんが20名お集まりになって、駅からここまで歩いて来られて、実際に展示を楽しんでいただいたと、こういう企画でございました。これは本当に公民館の責任者の方の強いお気持ちで、たくさんの方が賛同して集まってこられたと、こういう催しでしたね。実際に展示を御覧になった後、この緑地も楽しまれて、1日、国

分寺の皆さんがはけの森美術館でひととき過ごしたという、そういう企画だったと思います。

あと、ひかりアートプロジェクト「対話型鑑賞会」というのは、これは初の受入れなんですけれども、熱心に対話型鑑賞会を推進されている御婦人のグループがいらっしやいまして、その責任者の方が、たしか国分寺だったかな、この近郊のお住まいということもあり、ここの美術館を会場に選んでくださったようです。

もともと、ひかりアートプロジェクト、対話型というのは、東京都美術館で成功体験があるようで、そのデータなんかも示していただきながら、こうやって私たちはやっていますということを教えてくださって、この場所に当館を選んでくださったようです。

私も初めての受入れなので、ちょっとまだ分からないことも多いんですけど、展示室の中で、ほかのお客様の御迷惑にならないように、参加者の方が、高齢者の方がとても多く含まれているということから、ちょっと椅子を二、三脚置いて、ある自分たちが選んだ絵の前で対話をしながらその絵の感想を述べ合うみたいな、そういう自由な感じの鑑賞の仕方というのを企画されているようですね。

実際に、本当に来館者の方が多い場合、ちょっと気になる点もございますけど、今の現状を見ますとそんなに多くないので、そういう形でやっていただけるのかなというところなんですけれども、いずれにしましても、また、これを実際にやってみて、その御報告はその後できるかなと思っております。

以上です。

【事務局】 追加で1つだけなんですけれども、美術館の企画では全くないんですけれども、隣の喫茶棟のほうで、3月の中旬から4月の初旬までで、小金井の観光大使のキン・シオタニさんという方と、はけの森、コマグラさんがタッグを組んで、お店の中でキンシオさんの個展をするということをやっておりました。こちら、特にカフェの方と美術館が連携をしたというわけではないんですけれども、一応、美術館に来て、さらにカフェに行っていただいた方には、美術館のノベルティーをプレゼントするという、そこだけちょっとだけ連携をさせていただきました。

この期間中はかなりカフェのほうにもお客さんが入っていたようでして、お店に入れずに外で待っていらっしゃる方もいたくらいで、キンシオさんの絵のほうも、展示だけではなくてそこで販売もしているということで、実際にお店に行ったら、その場でいいなと思った絵を買われちゃったりしたんですけど、そういうこともカフェのほうでしていただい

ているようでした。

以上です。

【中村学芸員】 では、2の今後の展覧会・教育普及事業等につきましては、学芸員の中村から報告させていただきます。

今後の展覧会についてですけれども、まず、こちらですが、ちょっと夏から変則的な形なんですけれども、「中村研一とモダニズム」という、現在仮のタイトルをつけておりますが、7月30日から9月28日までの第一期、そして、その後に10月31日から12月21日までの第二期という形で、二期制の展示を現在計画して調整を進めております。

こちらの会期、それぞれまだちょっと仮の状態なんですけれども、月曜・火曜休館というところは現在のシン人物画鑑賞からの形を継続しまして、開館時間も10時から午後4時半という形で、こちらもシン人物画鑑賞からの継続というふうになります。

観覧料のところは、今、一時的に一般400円、小・中学生200円というふうにしておりますけれども、ちょっとこちらの部分はまだ決定しておりませんで、あくまで仮という形で載せております。

この展示ですけれども、中村研一の生誕130年を記念して、モダニズムの時代を生きた画家・中村研一の画業を二期制で顧みるということで、一期の仮題を「モダニズム、出会いと展開」というふうにしておりまして、二期の仮題を「モダニズム、変容」というふうにして、これ、それぞれの会期において全て作品を入れ替えるという形で考えています。

この入替えて、一期のほうでは、他館からの借用作品と、それから資料というものを併せて展示しまして、二期のほうでは、他館からの借用作品と新規収蔵作品の公開ということとをそれぞれの目玉にして、作品を総入れ替えて、二期を通じて大きなテーマとしての中村研一とモダニズムの関係を考えながら、それぞれの一期、二期においても、別個のテーマというかポイントになるようなものをつくっていくという形で現在調整をしております。

先ほど、観覧料、一般400円、小・中学生200円というふうな暫定的な額で御報告しましたけれども、こちら二期制となるので、リピーターに対して何らかの特典というか、何かちょっとサービスができるといいなというふうに考えておりまして、ちょっとどういう形で、お金を割引するのか、それとも何かリピーターで来ると特典がもらえるとか、そういうふうにするのかというところを、ちょっとどうしようかということで検討しております。

関連事業については、まだ現在のところ調整というか詳細なところは詰め切れておりま

せんので、決まり次第、以降の運営協議会で御報告できればと思います。

教育普及事業、今後のものですが、まず、鑑賞教室ですが、こちらは例年のとおり、市立小学校、市内の9校において実施をするという見通しで、現在調整をしております。5月16日に南小学校が、今回の「ナカムラケンイチのシン人物画鑑賞」のほうに来館する予定であるという、ここは決まっているんですが、その他の8校に関しては、まだちょっと日程が決定しておりません。

ただ、先ほど言いましたように、夏と、それから秋冬という形で次の展示、一期と二期を行いますので、そちらの秋冬のほうにやはり多く希望が来ている状態ですので、多分また秋ぐらいに鑑賞教室の子たちが連日やってきて、みんなでそれをへろへろになりながらアテンドするという、そういう形になるのかなと予測しております。

実は、ここのことに関連しましては、特にバスを使って来館する学校に関しては、バス契約をしなければいけないというところもありまして、ちょっとそのバス契約をするには、まず何人がバスに乗って来るのかを確定させなければいけない、バスを運行するスケジュールを確定させなければいけないとか、そういった契約に関わる時間的なところというのもありまして、まだちょっと8校に関しては、今後、決定をしていくところが多く残っているという状態です。

近いうちに市内の小学校の図工専科の先生たちに一度お集まりいただいて、ほかの学校の状況とかというのも共有し合いながら、日程を詰めていきたいというふうに思っているところでございます。

今後の展覧会と、それから教育普及事業等については以上となります。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

では、質問、御意見等ございましたら。

【山村委員】 この「ナカムラケンイチのシン人物画鑑賞」、とてもいい展覧会で、さすが五木田さんと思いました。いい絵とかデッサンが選んであって、すごく見応えがある展示で良かったです。

ちょっと過剰かなと思ったんですけど、中村研一と美学者の人の本から引用してあって、それが線とかヴァルール（色値）だとか空間だとか、色の強さによって三次元の空間の構図が決まっていくんだというような話とか、すごく学びがあって良かったです。横にあった図版も、これもちょっと過剰かなと思ったんですよ。だけど、すごくなるほどと思ったものは、カイユボットとマティスの人物像の説明が、なるほどと思いました。

【鉄矢会長】 「あ、そうか」と。私も並べたことがないという。

【山村委員】 そう。それで、まさに黒の使い方がカイユボットでは、明暗の違いで表現している、グレーとかそういう形で、どっちかといえば今までの遠近法のヴァールの使い方なんですけど、マティスはそこにそういうのはあんまり使わない。色の強さで全体のヴァールを整えているというのがよく分かって、中村研一はこれを目指していたんだなという感じが再確認できました。ありがとうございました。

それから、ごめんなさい、質問なんですけど、中村ひのさんのほうにお願いしたいんですが、今度、研一の生誕130周年を記念して、この展覧会の予定の「モダニズムの時代」ってあるんですけど、モダニズムって非常に意味が広い言葉なので、今のところ考えているモダニズムの意味というのは、どういうことですか。

【中村学芸員】 中村研一がモダニズムというものを強く意識するということによって、やっぱりフランスに行く、西洋的なものをどうまず自分の中で解釈していくかということによって、西洋的なものを近代的なものというふうに言い換えることもできるのかなと思うんですね。ただ、そういうふうな形でフランスに一度渡ってから、実は私の中で少し注目したいなというふうに思っているのは、帰ってきて東京に住むようになったというタイミングで、近代という時代を中村研一自身がどういうふうに意識するようになったのかということに注目しています。

これはちょっと「中村研一の往還」展、去年のものとも関連するんですけども、中村研一は関東大震災を体験していないわけです。関東大震災の前の東京というものを立ってフランスに行って、帰ってきたら、東京は関東大震災を受けて新しい近代都市としての東京に変わっていきこうとしているときであった。さらに、そのタイミングで、中村研一が帰ってきたときには明治神宮も出来上がって、もう新しい聖地として自分の長らく使っていたアトリエの横にあったということによって、そういう変わっていた東京というものを中村研一がまずどういうふうに意識したのかということについて、近代的なものというのを中村研一が、西洋的なものではなく自分の暮らしている日本のものとして、どう解釈したのかということにちょっと興味を持っています。

一方で、やっぱり中村研一と戦争絵画というものが、今まですごく強く結びつけられてきたということによって、戦争絵画というものは、モダニズムというものと、ある意味すごく分断したものというふうに私自身ちょっと捉えているところがあったんですけども、果たしてそうなんだろうかということも、これはちょっと二期のテーマに関わってくるこ

となんですけれども、ちょっと気になっているんですね。

これは、中村研一が特に船の絵を描いている、この船をめぐる意識として、どうだったんだろうかということを気にしているんですけれども、恐らく中村研一は、船という水に巨大な構造物が浮かんでいるというものに対して、これはかなり戦前から、恐らく画家として興味を持っている。多分モチーフとしてそういうものを好んでいるわけですが、それがだんだん戦中期になっていくと、はっきりと戦争の勝利というものに結びつく表象という形で、例えば「軍艦」とか、それから「マレー沖海戦」とか、そういったものを描くというところに意識が傾いていく。そのときに、近代的なモチーフとしての船というものに対する中村研一の意識は、それに塗り替えられてしまったのかということ、そうじゃないのかということ、塗り替えられてしまったのかどうなのかということ、を、ちょっと見てみたいなというふうに思っているということがあります。

タイミングよく、実は新規収蔵作品で「艦隊入港」という、1937年に中村研一が土佐の宿毛湾に日本海軍の艦隊が入港してくるというところを描いた作品が当館に寄贈されたんですね。なので、これの初公開ということも併せて、ちょっとその辺りのことを考えられないかなというふうに思っているということがあります。

最後のポイントは、実はこれは中村富子夫人のイメージということなのですが、とにかくたくさん描いている中村富子夫人のイメージというのが、中村研一の絵の中ではある意味すごくテンプレートになってしまって、マンネリ化していくという感覚というのは、どうしても受けるところはあると思うんですが、ただ一方で、中村研一がそんなに繰り返し富子さんのことを描くということの中で、中村研一自身の中では、ただマンネリズムに陥って漫然と描いているということではない何かがあったからこそ、戦後に至るまで、結構しつこく富子さんのことを描いていたんじゃないかということにちょっと注目をしてみたいというふうに考えています。

そういう意味で言えば、そういう富子さんを描くというタイミングこそが、東京に帰ってきてすぐ結婚するということから始まっているわけですから、モダニズムというものを自分のものとして捉えるというタイミングから始まって、戦争によってそれが終わるんじゃないくて、戦後まで続いていくというモチーフであるとするならば、結構中村研一にとっては唯一のモチーフじゃないかなということがありますので、一期、二期を通じて、実は中村富子というモデルを中村研一がどう見て描き続けたかというところに、どうモダニズムという感覚というものを見いだすことができるかというのもポイントにしたいなとい

うふうに思っております。

【山村委員】 なるほど。ということは、技法的な絵画としてのモダニズムって意味じゃなくて、対象、モチーフとしての都市だったり、モチーフとしての軍艦、いろんなテクノロジーとしての軍艦とかそういう肖像もありますね。戦争って一番、テクノロジーの戦いなわけだよね。3番目に富子夫人を描くことによって、富子夫人の服装だとか家具だとかファッションだとか、明るくなっていくもんね。そういう意味のモダニズムというものを取り上げるという、そういう感じなんですね。

【中村学芸員】 はい、そうですね。

【山村委員】 分かりました。

【中村学芸員】 特に戦後の富子夫人の、何かあんまり必要がなさそうなんだけど、とにかくベールをかぶっているというイメージがなぜ生まれるのかというのをちょっと。

【山村委員】 水着のやつもあるじゃん。

なるほど、よく分かりました。ありがとうございます。

【原田委員】 いいですか。感想と質問です。

シン人物画展は、「プロペラひげ」以外は何回か見たことある絵だったと思うんですが、このように肖像画、婦人像、裸婦と三部制で見るとすごく圧倒されるというか、この人、こういう人だったんだという、改めて迫力を感じました。

面白かったのは富子さんの話で、富子さんのお話を書いてあるでしょう。これが実に自然な感じの話が出ていて、特に裸婦をめぐる話ですね。あれってそんなに気にするものかなと思ったんですが、確かに自宅にアトリエがあるから、自宅によその女の人に来て、裸になっているわけですね。それは、奥さんは気が気じゃないなというようなところが率直に語られていて、それも研一が「いや、これは訓練だから、稽古だから」と言うと、奥さん、納得しちゃうというところが、2人の関係がよく分かって面白かったです。

【山村委員】 お父さん、軍人なんですよ。

【原田委員】 そうですよ。お父さん、駄目だって言ったんでしょう、あれ。

【山村委員】 そうですよ。ヌードは描かないなんて、そんなすぐばれるうそついて。

【原田委員】 それから、今度の二期制の展覧会で、リピーター特典というのは、いろいろあって楽しみです。何か1回来てその半券を持っていると次、安くなるとか、2回まとめて買うと安くなるとか、いろいろあるんですが、どうしたら来たくなるかというのは難しいですね。

【中村学芸員】 そうなんです。

【山村委員】 府中市美術館は、春の江戸絵画展のときに2度目半額ってなっていますね。

【原田委員】 やっていましたね。

【山村委員】 大体そうやっています。

【原田委員】 何かもらえらるともっといいんですけど。楽しみにしています。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

私は山村先生の話聞いて、中村ひのさんの回答を聞きながら、どんどんモダニズムが分からなくなってきたんですね。いや、頭の中では勝手ながら、そうか、モダニズムに関する本とかを学芸大学で特集して、モダニズムとはこういう時代だみたいなものを並べたら、この展示と絡みながら面白いことができるかなと思ったけど、多分本に出ているモダニズムとはちょっと違う気がして。

【山村委員】 いや、幅広いんですよ、本当に。

【鉄矢会長】 そうですね。でも、私は建築屋上がりなので、多分建築のモダニズムからするとちょっと違うような気がするし、今、分からなくなっていますという感想です。

【中村学芸員】 逆に、多分そういうモダニズムって、ある人にとってのモダニズムはこうであるという捉え方はできるかもしれないけれども、普遍的なモダニズムとはこうであるというのはすごく難しいんだと思うんですね。

なので、そこで言うと、中村研一という人間が捉えたモダニズムというのは少なくともどんなものだったのかということをやっとテーマにしていきたいなというふうに思っております。

【鉄矢会長】 分かりました。ありがとうございます。

そのほか御質問等なければ、次第の3、令和7年度の事業の予定と予算というところで、お願いしてもよろしいでしょうか。

【事務局】 すみません、予定と書いてしまったんですけど、予定というか予算のお話をちょっとさせていただこうと思います。資料の3の一覧表を御覧いただきながらお聞きいただければと思います。

全体としては、ちょっと少なくなっているように見えるんですけども、その内訳についてちょっとお話ししていこうと思います。

一番最初の美術館の運営に要する経費というところですが、昨年度と比べて微増にはな

っております。こちら、要因としては人件費の調整によるもので、少し増額となりました。

次に、2つ目のはけの森美術館維持管理に要する経費というところが大きく削減をされているように見えるんですけれども、こちら、ほとんどの項目では前年同額でついております。昨年度はついにエアコンの入替え工事がかなった年でございまして、実施のほうをさせていただきました。その分、令和6年度の予算に多額の金額が乗っかっていて、その金額が今年はなくなったというような感じになっております。

今年、全く何もほかにプラスでつかなかったのかというと、そうではなくて、今年度は喫茶棟のほうの改修の予算が若干ついております。いつもよりはちょっとつけていただいているかなというところです。

3つ目の美術館の事業に要する経費というところが、こちらは昨年度よりも増額になっているように見えると思うんですけれども、こちらは展覧会の数が、去年エアコンの入替え工事の関係で、いつも3回のところ2回だったので、その分、3回分の予算がついたということで、例年どおり頂いたかなというところです。

最後の美術の森緑地の維持管理に要する経費というところ、こちら前年とほぼ変わりがないように見えるんですけれども、ちょこっと変わっております。高木剪定の予算が令和6年度はついたんですけれども、今年についてはおりません。その代わりと言っては何ですけれども、緑地のほうの管理台帳をつくる予算のほうがつきました。今持っている管理台帳のほうが大分古かったので、もうそこに登録されていないような木もどんどん大きくなってきてしまっているというのもありましたので、どこかで更新をしたいなというふうには思っていたのが、今年ようやくついたかなというところです。これに基づいて、高木の剪定というのを、計画を立ててやっていきたいなというふうに考えております。

予算のほうについては以上になります。

【鉄矢会長】 予算に対して、御質問等ございますでしょうか。

質問です。この物価高騰と人件費高騰の折、新しい人が入ろうなんていうことはとてもできない状況の人件費の計上の仕方なんじゃないかなと思って心配します。大学も今大変なので。役所も大変なんです。美術館もそうすると、学芸員の皆さん、みんな違う学芸員になって、いなくなっちゃったらどうするんだろうという。ある程度の、今の新しい新入社員がこんな金額取っているから、みんな人件費を何とか上げようと努力している中で、何とか考えたほうが、大変なことになってからじゃ間に合わない気がします。意見です。

【事務局】 ありがとうございます。

【中川委員】 ありがとうございます。

市も会計年度任用職員という制度を使って、皆さんの人件費を措置しているわけなんですけど、そこについては、値上げしてくれと言っても上がらないんで。なので、やっぱりこのやり方じゃ駄目だというのは、もうずっと指摘いただいていたところで、もう本当に駄目じゃない？ ということで、ちょっとある意味反旗を翻すじゃないですけど。そもそも美術館の運営方法、このままで行けるのかというのは、もう根本から見直しさせてくれというふうに理事者に言っているところです。存続できるのかという。

【鉄矢会長】 いい議事録が残ると、いいと思います。

そのほか、ご質問等ございますでしょうか。

では最後に、4番のその他について、御意見等ございましたら、意見交換という形で。

大丈夫ですか。畑島委員、今日しゃべっていないですよ。

【畑島委員】 じゃ、ちょっと展覧会の感想で一言だけ。

絵と文章が代わる代わるに來ることで、自分の中で対話しながら見ることができ、新しいというか、鑑賞の方法がとても印象深かったです。ありがとうございました。

【鉄矢会長】 余計なのか多過ぎるのか、いろんなことはあるけれども、面白かったです。ないですよ、あんまり、あんなにいっぱい。あるんですか。

【山村委員】 最近、解説が過剰なことも結構あります。

【河合顧問】 最近「ここがポイント」までわざわざ書くの、こんなキャッチフレーズで、意外に。昔、博物館は能書きたれが多くて、言葉で説明で、むしろ作品に当たる資料が参考みたいで。美術館はできるだけ、例のホワイトキューブの展示で、作品をして語らしめよというのがずっと続いていたんです、特に近代美術。そういうふうに、山村さんも含めて僕なんかも、そっちのほうで教わってきちゃった部分はあって。ところが、美術館の博物館化で、博物館の美術館化になって、今きていると。

言わんとするのは、言葉では幾らでも言えるんだけど、何か言葉を読まれてちゃんと鑑賞してくれないじゃないかと、美術の人間はまず言いたくなるというのが多分あったんですね、これまで。

逆に、ギャラリートークなんかみたいに対話していくと、鑑賞してくれる方自身が作品を見ているわけじゃないですか。だから、それで共有できるというのがあるから、割とギャラリートークは力が入るときがある。今、ただの列品解説じゃなくて、対話型なんてやっているのも、そうすると、鑑賞をしてくれる人も一方的に聞くんじゃなくて、自分はこ

う思うとか、入っていけるというのがあるんですね。だから随分変わってきてはいますよね。

【山村委員】 確かにああいうふう言葉があると、それをちょっと読んで絵を見ると、自分はどうかとか、そういう自分の中の対話が生じるので、それ、いい方法ですね。

【河合顧問】 導入部に、非常になると思うんですね。特にこういうふうな静かな感じで見られるとき、押すな押すなだと、あれだけ情報が多いと、とてもじゃないけど読んでいられないけれども、今日、僕も皆さんいらっしゃる前に、誰もいなくなった会場で改めて全部読んでみたんですね、何時間かかるかなという。でも、そうするとやっぱり言わんとすることがどういうふうな、絵との鑑賞がよくできると思うんです。

【鉄矢会長】 企画側の意図はすごくよく分かるような感じがしましたね。企画外の、企画した側じゃない見方はしなくなっちゃうというのはありますね。

【河合顧問】 ちょっとね。

【鉄矢会長】 それはどっちなんだろうというのはあるんですけど、でも企画した側につられた解像度のアップの仕方は面白いですね。解像度、上がっちゃったもんねという。

【原田委員】 「プロペラひげ」も、最初見たとき、右側がはみ出ているって全然気がつかないで、解説読んで「え、そうなの」って言って、もう一回見直しますね。いかにぼーっと見ていたのか分かったりしますね。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

では、続いて、次回の会議の日程について決めてよろしいですか。

【事務局】 次回の展覧会が、予定だと7月の30日から9月の28日ということになっております。恐らく8月最初、中旬ぐらいはお盆かなと思うので、その後から9月ぐらいがいいかなというふうには思いますが、いかがでしょうか。

【鉄矢会長】 今年の夏は暑いんでしょうかね。

【事務局】 暑いと思います。

【鉄矢会長】 灼熱の中を歩いてくるのかと思うと。今日来ると別に何とも思わないんですけど、あれがじりじりしていると嫌だろうな。きっとじりじりしているんですね。

8月、お盆の後っておっしゃいましたね、今。

【事務局】 お盆の後か9月中であれば、会期でございますので。

【鉄矢会長】 じゃ、8月の29、金曜日、いかがでしょうか。

【事務局】 大丈夫です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。スムーズに決まったので。

そのほか、ないでしょうか。

なければ、以上ではけの森美術館運営協議会を終了します。お疲れさまでした。

—— 了 ——